

工チカ連載

テンサイモノカキ

工チカ



「夜のながめ」

夜遅い時間の飛行機に乗ったりすると、気づけば外を眺めていることが多い。離陸するまでの間は、特に窓の外から目が離せない。

滑走路への道標となっているオレンジ色の丸いランプが、広い地面に点々と光を放っていて、その中を飛行機がゆっくりと進む。暗闇の世界で小さな光がひとつずつ過ぎ去ってゆく様子を、私はただじっと眺めているのだ。

こんな情景を眺めていると、頭の中にでも目の中にも、自分の中に留めておきたくなる。そして、いつか何処かにこれらの情景を再現させたいと思う。

私が夜を眺めることを好きになっ
たきっかけは、幼い日、ほんの一瞬
訪れた夜のながめだった。

家族でレストランへ行った帰り、
幼い私は心が満月になった程の満た
された気持ちで車の後部座席に寝転
んでいた。車の天井に、銀色のスタ
ンドに立てられて出てきたソフトラ
ームなどを思い浮かべると、とう
とうその場全てが満月の心に照らさ
れてしまった。

その時、車の天井が光ったり元の
灰色に戻ったりしていることに気が
ついた。顔にも光がちらつくのを感
じた。光の源を探してみると、窓の
外が光で満ちている。うんと仰け
反ってみる。移りゆくオレンジ色の

光が次々と差し込んで来て、目の中
を光でいっぱいにした。万華鏡みた
いだった。家族の運転する車にゆら
れながら、明るすぎる夜のながめに
見入っていた。

あれは何歳の時だったのだろう。
わからないのだが、あの日の吸い込
まれるようなながめだけは、いつま
で経っても覚えている。



工チカ
下関市出身。
二〇一四年から
一六年迄「俄」
の会に参加。童
話に随筆、戯曲
と何でも書く。
修行中。ただの
チカではない。



みみより 掲示板

このコーナーでは
わたくし、「みみよりうさぎ」が
みみよりの情報をご紹介します。

「お掃除ダンス」人気急上昇中



ほうきとハタキを手に、
クルクル回ったり
ジャンプしたり
ルンルン踊りだす
ただ楽しいだけの動画



●モノログ再配信&上映会予告

今年の2月4日にライブ配信した一人芝居
「モノログ」をZAIKOで再配信します。
映像の切り替わるタイミングや遠景を増
やすなど編集を重ね、より作品の世界観
を味わえる舞台映像になっています。
また、各地でのスクリーン上映会を予定。
大画面の臨場感、音も会場で聞きやすく。
詳細は、ホームページの最新情報、各種
SNSなどでお知らせします。
お楽しみに♪



↑
QRコードで
かんたん視聴♪



神楽舞と朗読劇
全作品をYouTubeで
無料公開中！



「うらやす物語～ふるさとの神話～」

現代美術センターCCA北九州にて、ジュリアン・サル
メントさんの「ジャパニーズ・トラフィック・イエ
ロー・タイド」が展示されています。部屋中が黄色に
包まれた空間を舞台に、先日3月20日、パフォー
マンスをさせていただきました。当日の様子はSNSでも♪



●サロン開設ご案内

江原千花のオンラインコミュニティサロンが、
この春から、CAMPFIREにオープンします。
「江原千花の、創造的な舞台裏」をテーマに、
普段の工夫や、作品と向き合う過程、
多彩な要素をひとつひとつ見て、知って、
作り手の視点を楽しめる特別なサロンです。
運がよければ、稽古場からも直接レポート！
未公開のあれこれ、ちょっとした動画も、
会員さん限定でこっそり共有します。
クリエイティブな時間を、あなたに。



～みみより「たいそう」の時間～

今回は、体操を紹介します。
うさぎといっしょに体を
うごかしてみましょ！



「前くつ」 うさぎさん、息、とめないで！
ふーつ。ふーつ。

【会員特典】

年2回発行の「ちー新聞」お届け
会員限定Facebookグループへのご招待など
チケット先行予約（※イベントによってはない場合もあり）



こんにちは！ 下関リーディングの会です。

下関リーディングの会
代表 江原千花

下関リーディングの会は、二〇一六年に始まった市民活動団体です。リーディング(朗読劇。台本を持ったまま演じる)を通じて地域活性化を目指して、市内の図書館や学校などで、リーディング公演や表現ワークショップを開催してきました。メンバーはプロアマ問わず、年齢も経験も幅広い、個性の豊かな顔ぶれです。

昨今のコロナ禍の影響で、なかなか思うように活動できず、最後に集まって稽古をしたのはすでに一年前……。

はやく、また以前のように元気にあちこち飛び回って活動したいところですが、いまはそれぞれ、元気に過ごすことが第一です。オンライン稽古もできたらいいのか？あれこれ考えつつも踏み切れずにいる代表江原です(汗)

オフィスのほうでは、一人芝居のライブ配信という、我が家としてはなかなか前衛的な試みができました。ここで得た気付きだとか、活かせそうなところを、リーディングの会にこれから還元していきたい所存です。ご期待ください。会の方でも四月は「春の市民まつり」で過去作品の記録動画上映を行います。



写真 大野真代

さて、下関リーディングの会では、いままでも色々な公演やワークショップを開催してきましたが、このページでは、ちよつと深掘りしながら活動を紹介します。



下関リーディングの会
幹事長 江原美千代



下関リーディングの会が発足して、初めての公演場所は児童養護施設でした。今から五年前の二〇一六年夏の事です。当時はまだメンバーも少なく、出演は演劇経験のある三人のメンバー、作品は青空文庫から選び「殿さまの茶わん」「町のお姫さま」「みみず先生の歌」「海のかなた」の四作品を上演しました。

背景画は施設の先生が描いてくださった西洋の街並風景画。「海のかなた」作品中のバイオリンの音色は今回冒頭インタビュページでご紹介した岩倉万希子さんが提供して下さった音源でした。沢山の方に支えていただきながら叶った公演です。



初めての訪問公演、メンバー同士はまだお互いに馴染みのない状態で、稽古できたのもわずか数日でした。それでも終わった後に、私たちの元に駆け寄って来て「楽しかった〜！」と満面の笑みを浮かべてくれた少女がいたことに、この活動を続けていく大きな勇気をもらいました。

発足して丸五年。様々な地域イベントや学校・公共施設で公演やワークショップを重ねて来ましたが、この一年は、みんなが集まってという活動ができませんでした。

四月から新年度。あらゆる気持で出来る事を頑張りたいと思っております。



似非飴



ただのエッセイなのに、なんだか変な当て字をしてしまいました。なんだかよく分からない感じが、妙にじっくりきているのです。

情報社会と呼ばれる程に、ありとあらゆる情報が浮かんで消える昨今。ちよつと疲れちゃったかな、と思うとき、わたしは「よく分からぬもの」について考えを巡らせてみたり、ふわふわと想像を膨らませて、一人で遊んでみます。

浮かんでる雲の形を見ては「孫悟空はああいう雲に乗ってるんだよなあ(乗ってみたいなあ)」と思い、自分の手のひらを眺めては「おつ、この前と手相が変わってるような気がするぞ。どれどれ」と、一人で盛り上がった。

こうして書くとは、もはや不審者ですね。後者については、私が手相に詳しくないからこそ「なんだかいつもと少し違う、でも一見どこが変わったのか分からない」という、間違い探し&記憶力セルフチェックのような部分で楽しめているのかもしれない。だから、手相に詳しい読者のかた、くれぐれも、私に手相の正しい知識のようなものを教えないでください。(笑)

答えを知らないものをお題にして、ただ空想して遊ぶ時間。勝手な答えを出してもいいし、絶対にあり得ないと思う空想をしてみるのも楽しい。そうしていると、自分がいかに何も知らないかを確かめられる気がして、とても落ち着くのです。大人になるにつれて、知っていることが増えていく一方、それらを考えることに一生懸命になってしまつて、「知らない」部分を意識できる機会は、どうしても減ってくるのを感じます。

知らない部分のことを放ったらかしにしている、いつの間にか、自分の知っている範囲だけで考えるようになってしまつて、いつの間にか、想像力が働かなくなり、そして最後には、すごく偏った考え方しかできなくなる……。という恐ろしい、これまた空想の、(でも案外あり得そうな強迫観念が、常に頭の片隅に居座つていたりします。そのことを考えると、いつもゾツとするようです。

自分では分からない、自分の無意識。自意識過剰とはよく言ったものだと思いますが、ほんとに、そんな感じですが、でも大切です。無意識そのままより安心です。いや、どっちもどっちかな。

空想するのは楽しみでもあり、あるところでは、想像力を失うことへの恐れから、クセなのかもしれません。

まあ、どんなに多くを知ろうとも、人間知らないことのほうが何倍も多いのだと思えば、知ることへの怖さは微塵もありません。知るって楽しい。

江原千花 自己紹介
一九九五年山口県下関市出身。
梅光学院高等学校音楽科を卒業後、女優・モデル・ダンサーとして活動。市民活動団体「下関リーディングの会」代表。神楽舞を練習中。身長一六八センチ、細長い中身も含め「なんか変ないきもの」というとびったり。

編集後記

今回は創刊記念という事で、広く無料配布しました。

第一回のゲストを考えたと、人生の諸先輩も良いけれど、折角の機会だから、異国の地で頑張る同級生、高校時代に大きな刺激を受けた、あの、まさちゃんに話を聴きたいと思いましたが。

彼女自身の覚えていない、あの頃の何気ない一言や行動。それを私が宝物のように覚えていて、今回インタビューの鍵になったように感じました。まさちゃん自身も、あの頃を思い出して何か発見があったようです。そのことを考えると、ああ、生きていくという事は、本当にそれだけで、価値のあることなんだなあと思うことができました。

今回は、思いもよらず「記憶」が価値となりましたが、それ以外の部分でもきつと、人はそれぞれ、自分では理解しきれない想像できない意外な部分で、他の人の役に立っていたりするのかもしれないと思えました。

だから、自分では「私は何のために生きてるんだろう」と思っても、価値は背中のように隠れているだけだと思ってしまう。

ち一新聞はこれから年2回、春と秋に発行していきます。今秋の第二号は「メイキング・オブ・ち一」という有料サロンの会員さんにお届けするほか、ち一新聞を単品でも読んでいただけるよう、オンラインショップでも広く一般販売します。ち一新聞、よろしければ、また読んでください。

オンラインショップ

